

### 吾輩は猫が好きではない（三）

木藤隆雄

漱石は大の落語好きとして知られている。子規と友人になったきっかけも、お互い落語が好きということであった。

漱石の句「初夢や金も拾わず死にもせず」は、恐らく円朝の名作「芝浜」を下敷きにしたものだろう。

又、「吾輩は猫である」は、全編落語の影響を受けていると言われているし、「三四郎」の中に三代目柳家小さんの名前が出てくるのは有名な話である。

漱石は、最初「鼻の円遊」として知られた三遊亭円遊を好んでいたが、後に三代目小さんのファンになったようである。漱石は二人に関して、次の様に述べている。「「幫間（たいこもち）を演じる場合、円遊の幫間は、いつまでも円遊が残る。ところが、小さんが演じた場合、小さんが消えて、幫間がいきいきと動き始める」。この言葉に私は驚いた。落語の神髄を見事に言い当てているのだ。

米朝さんは、「上手い噺家の落語を聴いていると、演者が消えて、落語の登場人物が生き生きと頭の中で動き始める」と著書に記している。

歌丸さんは、NHKの「演芸図鑑」に出演した際、次の様に語っている。「我々が目指す落語は、喋っているうちに演者が消えて、登場人物が客の頭の中で生き生きと活動し始めること。落語の描く情景が、カラーで客の頭の中にイメージされることです」。

これは、演者の噺家が日々寄席の高座で修行して、長い年月をかけてようやく到達出来る境地である。

それを、演者ではない聞き手の漱石が、ちゃんと理解していたということに驚きを禁じ得ない。漱石の分析力、理解力は、群を抜いている。

ところで、噺家の中にも俳句好きがいる。

有名なのは、九代目入船亭扇橋さん。一度、ある落語会の楽屋でお会いしたことがある。師匠は丁度着替え中で、私はステテコ姿の扇橋さんと挨拶を交わした。全く飾らない人柄だった。扇橋さんは、永六輔、小沢昭一、桂米朝、柳家小三治さんらと共に「東京やなぎ句会」で、長年俳句を作ってきた。俳句との出会いは古く、十代の頃。なんと「馬酔木」に投句していたという。

扇橋さんは俳句について次の様に述べている。「喜び、悲しみ、笑い、叫び、怒り、憎しみ、たわむれ…全てをすっぽり包み込んでしまう俳句は、本当に偉大な風呂敷である」。

扇橋さんの句は、「母の日の袋物屋をのぞきけり」「ふるさとは風の中なる寒椿」等、真面目で味わい深いものが多いが、小三治さんの句は、ふっと笑えるものも多い。

**煮凝りの身だけよけてるアメリカ人**

手をかざし昼寝とわかる安堵かな

これほどに老いても意地の梅二輪

志ん生さんも俳句を作っている。

**丸鬻で帰る女房に除夜の鐘**

慌ただしい大晦日の雰囲気が伝わってくる。

そういえば、私が十代の頃は、大晦日、女性が「新日本髪」を結いに美容院に行き店は大賑わいというニュースが、年の瀬の風物詩のようにになっていた。そんな懐かしい時代や世相までもが思い起こされる。たった十七音で。俳句って素晴らしい。（了）